

# 婦人と子ども

大正五年十二月十日  
第十六卷 第十二號

## 斯くてまた暮れゆく

根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉の處で動いて居る。而して、可なり色々のことが考へられ、試みられ、部分的に究明せられるに拘はらず、竟極の決定は何時までも其のまゝに残されて居る。——我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々々過ぎて居るのではあるまいか。時の経過は何程かづの進歩を積み上げてゆくには相違ない。しかし其の進歩は、餘りに氣まぐれな、無秩序な、斷片的な集積に過ぎないものであつて、そこに何等の系統的組織的進歩といふものを見ない。思へば餘りに非學問的なことではある。

思ひつきは時には非常に賢明なる真理の發見者である。しかし又、非常に危険なる誘惑者である。思ひつきは偶然の力で吾々を其の一點に惹きつける。それだけに、全局の關係を忘れさせ、前後の關係を失はせる。それはそれだ。しかし、それは全體の中のそれだ。據のある基礎の上に位置すべきそれではなければならぬ。思ひつきは此の明白な事實を没却させる程に吾々の心を部分的に興奮させる。——我國の幼稚園教育界に、またしても此の思ひつきの多いことである。

○  
意味の分らない模倣や雷同や。同じく意味のな

い反對や批難や。こんなことの繰返へしの中に我國の幼稚園教育界は、餘りに無意味に疲れて居る。風に吹きまはされて、ぐら／＼と東西南北を廻りつかれて居るのでなければ、たゞ無意味に風に逆つて疲れて居る結果は、つまり、どつちもくだらないことに倦き／＼して仕舞はざるを得まい。意味のない處に厭倦がある。根のない處に枯死がある。

○ 『分らない！』『分らない？』我國の幼稚園界は餘りに平氣に、口癖の様に『分らない』を繰り返して居る。而して、一年たつても、三年たつても、五年たつても、同じ『分らない』に立ち止まつて居る。中には何が、如何に分らないかをも知らずに、たゞ『分らない』で居る悲しめる樂天家もある。それで何時になつて分つて來るであらうか。つまりは、『分らない』が、益々平氣になる許りかも知れない。

○ 分つて居るといふ。其の多數は、『此頃疑ひが無くなつた』人である。或は、小さい枝葉の一局部に

安住停立して、そこに、幼稚園教育問題の全部を懸け、又自分の全部を懸けて居る人であつたりする。之れも一つの悟りの開き方かは知らぬ。しかし幼稚園教育を根本的に考へて居る人ではない。

○ 吾人は、年の暮毎に、餘りに同じ處をぐる／＼廻りして居る我幼稚園教育界に、物倦い様な心持ちがする。又餘りに齒がゆい様の心持ちもする。——敢て問ふ、我國幼稚園教育の問題は、年毎に、どれだけの大きさを加へて來れるや。どれだけの深さを増し來れるや。換言すれば、問題それ自身がどれだけの進展をなし來れるや。殊に、此の大正五年に於て。

○ 吾人はたゞ將來の希望だけに力を鼓して居る。それで現在の物倦さと、齒がゆさとを忘れやうとして居る。それで我國幼稚園教育界の、現在の張り合ひなき如き淺さと輕さとを忍んで居る。——大正五年の暮れてゆく今日、我國幼稚園教育に就て吾人の最も正直に感ずる處は斯ういふ感じである。(倉橋生)